

# クアラルンプール日本人学校における国際理解教育の実践

前クアラルンプール日本人学校 教諭

熊本大学教育学部附属小学校 教諭 岩 永 聡

キーワード：在外教育施設，クアラルンプール，国際理解教育

## 1. はじめに

今マレーシアは、日本で注目されている国の一つである。治安のよさ、物価の安さ、気温が安定しているなど住みやすさが要因となり、移住先の国として人気を博しているからである。そのようなマレーシアの首都クアラルンプールに今回派遣され、海外での授業やマレーシアの教育についてたくさん学ぶ機会をいただいた。

その中でも、クアラルンプール日本人学校の特色の一つである国際理解教育の実践の概要を紹介する。

## 2. マレーシアは多民族国家

マレーシアは、マレー系、中国系、そしてインド系の民族から構成される多民族国家である。それぞれの民族が、ほとんど対立もなく安定した社会を保ち続けている。また、経済面でもめざましい発展を遂げている国である。

多民族国家であるマレーシアでは、マレー系の学校、中国系の学校、インド系の学校、そしてインターナショナルスクールとたくさんの種類の学校があり、それぞれの言語で学習している。

また、マレー系、非マレー系に関わらず、どの学校に通うかは本人および両親の希望に委ねられている。その一方で中等教育では、公立学校の教授用語はマレー語だけに限定されており、非マレー系にとっては不利な教育システムになっている。初等教育段階においてマレー系の学校に通った子どもは、卒業後一年間の「移行学級 (Remove Class)」に通う。これは、中等学校に入学する前に一年間マレー語を勉強する制度で、非マレー系がマレー語を習得するために設けられている。

多民族国家であるため、このような複雑な教育制度になっている。

## 3. クアラルンプール日本人学校における国際理解

クアラルンプール日本人学校における国際理解教育には、下記のようなプログラムがある。

小学部	1年生～5年生	現地校の同学年の児童を日本人学校に招待し交流会を行う。 日本人学校の児童が現地校を訪問し交流会を行う
	6年生	マラヤ大の学生との交流会
	5・6年生	現地のカンボン（田舎）にホームステイを行う（希望者）。
中学部	1・2年生	現地校の同学年の生徒を日本人学校に招待し交流会を行う。 日本人学校の生徒が現地校を訪問し交流会を行う。
	3年生	現地校の生徒と一緒に日本人会盆踊りに向けた練習会を行う。 現地校の生徒と一緒に日本人会盆踊りに参加する。
	1～3年生	現地のカンボン（田舎）にホームステイを行う（希望者）。

このように、クアラルンプール日本人学校では、小学校1年生から中学校3年生までマレー系の現地校との交流会が計画され、国際理解教育の中心的な活動として位置づけられている。本校での交流会では、児童生徒が日本の文化（遊び・歌など）の紹介を行う活動を中心に交流し、現地校での交流会では、マレーの文化（遊び・歌など）を紹介されながら交流を行っていく。どちらの交流会も、児童生徒が中心となって活動を行い、教師がサ

ポートするようにしている。

クアラルンプール日本人学校では、世界でも珍しいホームステイを行っている。3～4人が1グループとなり、カンボン（田舎）のマレー人のお宅に二泊三日宿泊する活動である。日程の中には、現地校との交流も行われる。マレーシアの人々はとても優しく、子どもたちを我が子のようにかわいがってくれる。二泊三日という短い時間であるが、参加した子どもたちは、マレーシアの本当の生活に触れることになる。お別れのときには、涙する子どもも多数おり、マレーシアの人々の優しさ、そしてマレー文化を実感するよい活動となっている。

#### 4. 小学部6年生とマラヤ大の学生との交流会

小学部6年生は、小学生とではなくマラヤ大の学生との交流を行っている。なぜ、小学生と大学生と思われるかもしれないが、マラヤ大にはマレー系の大学でありながら、日本語を勉強し、日本の大学に留学を目指す教育課程（マラヤ大学予備教育部）が設置されており、マラヤ大の先生方（日本の高校から派遣された先生方）から日本語を使う機会が欲しいという目的で交流会が行われている。

マラヤ大学予備教育部は、マレーシアの大学に進学するための準備教育を担当する機関の一つであるが、第4代首相マハティール氏が提唱した「東方政策」の一環として、1982年、ここに日本留学のための二年間の特別コースが開設された。東方政策とは、西欧より急激な発展を遂げた日本や韓国など東方諸国に目を向け、その勤労倫理や経営哲学、技術を学んで、マレーシアの工業近代化を進めようというものである。これまでに3000人を超える留学生（主にマレー系）を日本へ送っている。

#### 5. お互いのメリットを！

小学部6年生を担当し、マラヤ大の学生との交流を行う機会があった。その際、マラヤ大担当の先生と打ち合わせを行い、日本人学校の児童、そしてマラヤ大の学生がお互いにメリット（児童は英語を使う機会、大学生は日本語を使う機会の確保）のある交流会にするため下記のことを確認した。

- 日本人学校の6年生は、英語を使って日本の文化について紹介する。マラヤ大の学生は、英語で質問したり、活動したりする。
- マラヤ大の学生は、日本語でマレーシアの文化について紹介する。日本人学校の子どもたちは、日本語で質問したり、活動したりする。

日本人学校の児童は、週2時間EC（English Communication, 英会話）の学習をしているが、実際の生活では買い物なども親同伴であり、自分で使う機会が少ないという現状がある。そこで、このような約束事を行うことで、日本人学校の子どもたちが、英語で会話する機会とECでの学びを生かす場をつくることができると考えた。

また、お互いが交流会当日だけ顔を合わせても交流がスムーズにいかないことも考えられるため、日本人学校からは英語で作成した自己紹介カードを、マラヤ大の学生からは日本語で作成した自己紹介カードを送り合い、お互いの顔や趣味を事前に知っておくようにした。お互いのことを少しでも知っておくことで会話が弾み、スムーズに活動に入ることができると考えたからである。実際の活動でも対面直後から「Hello ○○さん」「Why do you like sushi?」などの会話が行われた。

#### 6. ECとの連携

小学部では、現地の先生のもと週2回、英会話の授業が行われている。学級を英会話の能力別に3クラスに分け、少人数で授業が進められる。授業は全て英語で進められ、授業中は“*No Japanese*”がルールになっている。

そこで、ECの先生方に協力していただき、あいさつや自己紹介の仕方を復習してもらうとともに、日本の文化を紹介する時に必要な英会話を学習内容に加えてもらうようお願いした。ECの先生方も快く引き受けていただき、特に紹介する時に必要な英会話については子どもたちがスムーズに紹介できるようになっていった。また、実際に発表の練習を見ていただきながら、アドバイスをもらえたことで、発表の仕方を変えたり、英語の表現をよりわかりやすくしたりすることができた。

このようにECの先生方に協力していただきながら進めたことで、交流会に向けて子どもたちが英語を使って交流することへの苦手意識をなくし、積極的に英語を使おうという意識づけになった。

## 7. 国語との連携

マラヤ大の学生は、来年度4月から日本に留学していく。そこで、国語の「ガイドブックをつくろう」という単元の中で、自分の出身県のガイドブックづくりを行わせ、学生にプレゼントすることにした。学生は、日本語を勉強しており、その勉強にも役立つだろう、留学先がきまったら役立つだろうという思いがあったからだ。それぞれの出身県のガイドブックをつくらせると、さまざまな県から子どもたちが来馬しているため、ほとんどの県のガイドブックが出来上がった。

実際当日プレゼントすると、学生は目を輝かせながら、ガイドブックに見入ったり、質問したりしていた。大学の先生からも好評であり、後で20冊ほどプレゼントした。

## 8. 児童の時は英語で、学生の場合は日本語で

いよいよ交流である。子どもたちの中には、服装から日本の文化を伝えようと甚平や浴衣を着て交流会に臨む子どももいた。自己紹介カードの交換があったためか、対面後すぐから気兼ねなくあいさつを行ったり、趣味のことに話していたりする子どもたちの姿があった。

日本人学校の子どもたちから日本の文化についての発表では、子どもたちは今までの学習、特にECでの学習を生かしながら、スムーズに説明をしたり、実際に活動したりした。今まで「英語で話すの？」と不安げだった子どもが、自分の英語が通じたり、質問に対してしっかり答えたりすることを通して、自信をもった姿に変わっていった。次は、マラヤ大の学生のマレー文化の紹介である。1年間しか日本語を学んでないのだが、とても流暢な日本語で、分かりやすく紹介してくれたり、質問にもしっかり日本語で答えてくれたりした。子どもたちも、私たち教師もびっくりさせられた。楽しい雰囲気の中、それぞれの班で、英語と日本語が入り混じった交流が行われた。日本の遊びで遊ぶグループ、マレーシアの遊びをするグループ、なかには、大学生のギターで歌を歌うグループまであった。

そして、最後は、児童とマラヤ大の学生が交流前から練習してきた「輪になっておどろう」を歌い交流会を終えた。肩を組んで3回も歌うほど、お互いの交流・理解が深まった。



紙相撲を英語で説明



最後には肩を組んで

## 9. おわりに

どの国でも、現地校との交流は行われている。しかし、日本語を学んでいる学生と交流しているのは、クアラルンプール日本人学校だけではなかろうか。今回の交流のように、交流がお互いの文化を知るというだけでなく、それぞれが学んでいる言語を生かしていく場にするができることは素晴らしいことである。今後も、クアラルンプール日本人学校の6年生とマラヤ大の学生との交流を継続し、マレーシアの人々の理解を深めてほしい。